

## 大分と福岡の天理教

九州の福岡県と大分県の天理教伝道を考えよう。前回の「九州の天理教(概観)」と重なる部分があるがご容赦願いたい。

九州で最も早く天理教が伝わったのは熊本県であると前号に書いた。それに続くのが大分県、さらに次が福岡県である。

明治21、2年頃、大分県中津のランブ商人伏見三次郎は商売で大阪に滞在中、天理教の教えに触れ心惹かれる思いをもった。中津へ戻る時「みかぐらうた」本1冊を持ち帰ったという。「みかぐらうた」は明治21年11月1日付で初めての公刊本が天理教会本部開筵式時に出版されたが、その『御かぐら歌』であろうか。他に考えられるのは、筆写本か、もしくはおぢばより早く出版されていた天恵組の『拾式下り御勤之歌』(明治14年)かも知れない。

中津へ帰った三次郎は両親に「みかぐらうた」本を見せ、お道の話の聞かせた。翌年、再び大阪を訪れた時、「この有り難い教えをぜひ中津へ伝えて頂きたい」と船場分教会に依頼した。三次郎の父親、伏見長吉の手紙も添えられていたというからかなり感じるところがあったのであろう。しかし、大分県中津へ布教に行ったのは泉田藤吉であった。当時は教会制度ができてまだ日も浅く所属意識は薄かった。船場分教会に依頼したが、適当な人がいなかったので泉田藤吉が行くことになった。その頃、大阪の布教師はみんなお道の信仰者として仲間だった。誰が行こうかと相談し、大阪の布教師仲間では師匠格だった泉田が自ら赴くことにした。

明治23年、中津へ着いた泉田は伏見父子の家を拠点としておたすけに歩き、夜は寄り集まった人々に神様の話を聞かせた。みんな初めて聞く不思議な神様の話に胸ときめかせた。宇佐町出身天然氷製造業の宇都宮右源太は使用人が毎夜出かけるのを不審に思い、尾行したところ中津の伏見という家に入った。窓から様子を窺っていたが、泉田の説く神様の話にいつしか家内に入り、聞き入ったという。

やがて、中津町に現中津大教会ができ、宇佐町に現宇佐大教会ができる。中津と宇佐は隣接する町で、講社結成の頃宇佐の信仰者は泉田藤吉を宇佐から帰さず、中津の信仰者たちは泉田先生を早く中津へ帰して貰いたいと催促するといった具合で師匠の取り合いをした。このような熱心な求道心が二つの大教会を誕生させる力となったのであろう。

現在大分県内182カ所の教会の内、宇佐大教会所属が最も多く34カ所、中津大教会所属が15カ所ある。また中津から分かれることになった大分市分教会と安東分教会を合わせて大分県内に12カ所あり、合計61カ所である。泉田から始まる中津系がほぼ大分の3分の1を占めている。

その他、朝倉大教会が25カ所、愛豫大教会が17カ所、本島大教会と周東大教会がともに7カ所ずつの教会を大分県内に有している。

以上のように大分県の天理教は大阪、四国、山口からの伝道により現在の教勢になったと考えられる。

なお、朝倉大教会の教会が大分県に多いのは木屋瀬(筑紫)の南にある甘木(朝倉)へと伝わり、さらに南東に向かい隣接する大分県に入ったのであろう。日露戦争後に朝倉の伝道者が

大分県を布教地としたという。また、中津部内二豊分教会は伏見父子が始めた教会で、大分県北端の中津から北方の福岡、山口などへ教線を伸ばした。

ところで大分県の人口比教会数は九州で佐賀に次いで2番目に多い。九州では明治23年という早い時期に大阪から伝わり、県北を中心に広まったのが影響しているであろう。ちなみに明治29年末までに大分県には21カ所もの教会が出来ている。その他の九州各県は福岡33、佐賀8、長崎8、熊本12、宮崎4、鹿児島4(筆者調査。ただし資料によって数値が若干異なる)で、福岡は別格としても九州において大分が他県に先んじて本教が盛んになったことを示している。

福岡県は福岡市、北九州市の二つの政令指定都市を持ち、九州では他県を圧して人口が多く、当然教会数も多い。人口比教会数は佐賀、大分より若干少なく3番目である。

教会系統で言えば筑紫系統(筑紫、西海、朝倉、鎮西の各大教会)が最も多く、県内に205カ所あり福岡全体の30パーセントに上る。

明治24年、堤丑松という蚊帳の行商人が福岡県直方を訪れた。昼間は蚊帳を売り、夜になると病人を探し神様の加護を願った。堤は前年に入信した滋賀県湖東系統池ノ尻講社の講脇を務める人で、行商がてらおたすけをしていた。

堤は重病であった腸チフスの子を助け、逗留する宿の近辺で大変な評判となった。暫く滞在する間に直方の他、木屋瀬、上津役、宗像、朝倉などへまたたく間に広まった。堤の助け方は一風変わっておりお願いした後、口に含んだ水を「ぶー」と病人の顔に吹きつけるものだった。そして高熱の病人でも風呂に入れたという。無謀な行いに家人は驚いたが「必ず治る。死んだらそっくりな子を造ってやる」とまで言った。堤は信仰を始めて1年ほどにしかならないのに、何という自信にあふれたおたすけだろう。もちろん堤の真剣なおたすけの賜だろうが、教祖が御身をお隠しになった時の「今からたすけするのやで」とのお言葉通り、教祖が入り込まれたからだと考えると不思議なおたすけも納得できる。堤のおたすけから筑紫大教会ができ、その伝道線上に西海、朝倉、鎮西の大教会が、さらに千歳、南筑、渡瀬の教会ができ、熊本県天草に天島分教会ができる。

なお、千歳には57カ所の教会があり、その内南筑が49、さらにその内渡瀬に38あり、またその内天島に20ある。筑紫大教会の千歳系統は先へ先へと伸び、そこがまた大きくなっている。これについて高野友治氏は、これが斯道会(河原町大教会系統)発展の妙な一つの特徴であると評している。

福岡における他の伝道は、高知系(高知大教会、繁藤大教会など)が82カ所、撫養系(香川大教会、防府大教会など)も61カ所と、四国各県と山口県からの伝道により福岡県教会の20パーセントができたことになる。また、中津系統(大分市、安東含む)も60を越す教会があり、福岡の1割に近い。その他では東神田大教会が32カ所(全てが西鎮分教会)、岡大教会が29カ所(西北分教会など)の教会を有している。

(本文中の教会数は『天理教教会所在地録』立教173年版によった。現在は、多少変わっているかもしれない。)